

## 養蚕を通じた生業復活の試み ～南相馬市小高区の取り組みを事例に～

(株) 日本総合研究所 創発戦略センター マネジャー 井上岳一

原発 20km 圏内に位置する南相馬市小高区は、避難指示解除準備区域に指定されているため、今なお住むことはできない。地震、津波、放射能の三重苦にあえぐ南相馬市は、震災関連死が被災市町村の中で最多となっている。とりわけ、ほぼ全域が 20km 圏内に位置する小高区の状況は厳しい。

放射能の問題があまりに大きく、前に進むきっかけがつかめない小高区において、2013 年 4 月、ふるさと小高の再生を願う主婦三人が、NPO 法人「浮船の里」を立ち上げた。同時に、浮船の里は、コミュニティスペース「あすなろ交流広場」を始動させる。このあすなろ交流広場で、月一回住民同士の話し合いの場「芋こじ会」が開かれるようになった。

2013 年 5 月から始まった芋こじ会は、最初は不平・不満ばかりだったが、回を重ねる中で、「何かやらなければ」という声があがり始めた。そういう中から出てきたのが、かつて小高の経済を支えた絹織物をやりたいというアイデア。そして、どうせなら蚕を飼うところから始めて、自分達で紡いだ糸で手織りをしようという構想が生まれた。

だが、全員が素人である。養蚕も織物も経験者は皆無の中で、調べ、学び、教を請うて、一つ一つ形にしていった。震災前まで養蚕を営んでいた地元の農家や群馬県で養蚕から織物までを行っている方との幸運な出会いもあり、自分達の繭から自分達で糸を紡ぐところまでがようやくできるようになりつつある。織物も少しずつ上達し、草木染めもするようになった。

養蚕・織物を通じて、営みの力、生命の力、手業の力を実感した。桑畑での作業は地域に活気をもたらし、お蚕様は人を元気にさせる。まさに「天の虫」であった。織物は織姫達に生き甲斐を与えている。

養蚕を通じて、農の営みの意味を考えるようになった。原発被災地では、農の営みが途絶えたことで、風景が壊れ始めている。風景の破壊は、過去と未来の否定になる。だから、農の営みを諦めてはいけない。そして、農の営みを続けるには、研究者との協働による科学的な裏付けが必要である。同時に、楽しみながら耕作をし続ける人がいることも大切である。

この先に何があるか。養蚕から絹織物までができる体制をとにかくつくりあげる。その上で、自然の価値、手業の価値、関係の価値をテコに、小高に人が来てくれる仕組みをつくりたい。何年かかるかわからないが、先を急ぐことなく、一步一步着実に歩を進めていくことが何よりも重要である。それは、小高の人々から教えられた大事な教訓でもある。